

執着弁護士の 制御不能な極甘溺愛

加地アヤメ

Ayame Kaji



Eternity
BUNKO

目次

執着弁護士の制御不能な極甘溺愛

5

書き下ろし番外編

執着弁護士の制御不能な極甘新婚生活

309

執着弁護士の制御不能な極甘溺愛

一

ワーキングウーマンは、体が資本である。

そのため健康に気を遣う私のモットーは、早寝早起き。そして、バランスの取れた食生活。

毎日体に必要なサプリを飲んでいるし、定期受診も欠かさない。そのおかげか、毎年会社で行われる集団健康診断で引っかかったことはなかった。

それなのに、毎月やってくる女性特有のアレの前になると、どうしてもこんなに具合が悪くなるのだろう。

——だ……だる……

たかばともえ

鷹羽朋英、社会人六年目の二十八歳。

現在私は、大いに苦しんでいた。

頭がぼーっとするし、下腹部には常に鈍い痛みが走っている。さつき弱めの鎮痛剤を飲んだけど、なかなか効いてくれず、痛みに変化はない。

——もう少し効き目の強いヤツを飲めばよかった……

自分自身の選択の過ちにがくりと肩を落とす。

できることならこのまま会社を休みたい。今日は一日布団に包まり、温かいお茶を飲んで過ごしたかった。だけど有休はなるべく使いたくないし、仕事を溜めて、翌日以降の自分が大変になるのも避けたい……

肩を落しながらバッグを手にし、だらだらとアパートを出た。

月に一度、いつも同じようなことで悩む。でも結局、休まずに仕事へ向かうのがお決まりのパターンだ。

どうにか痛みと怠さ^{だる}を誤魔化しながら最寄り駅まで辿り着いた^{たどり}。
ホームに立って、ぼーっと向かいのホームの電車を眺める。

——あの件確認して、先方に連絡しなくちゃ……あと、新入社員に提出をお願いした書類、締切今日だったなあ……皆忘れてないよね？ 確かまだ出してない人がいたはず……

今日会社でやるべきことを頭に思い浮かべているうちに、だんだん血の気が引いてきた。それと同時に胃の辺りから朝食食べたものが込み上げてきて、ウツ、となる。

——貧血かな……これ、まずいな……どこかに寄りかかった方がいいかも……

急いで近くにあった鉄柱に寄りかかる。そのまま少し休み、なんとか吐き気が落ち着

いてくれなしかと願うものの、なかなか吐き気は治まってくれない。
 まずいと思いがながら、込み上げてくるものを呑み込んで呼吸を整える。しかし、更に
 えづきそうになってしまい、咄嗟に口を手で覆った。

——だめだこれ。……こんなじゃ電車なんか乗れない……

乗る予定だった電車を見送り、駅構内にあるトイレに向かおうとした時だった。

「顔、真っ青ですよ。大丈夫ですか？」

口を押さえながら声のした方を見る。声をかけてきたのはスーツ姿の若い男性だった。
 水色のシャツと印象的な淡い黄色のネクタイが視界に入る。

——レモンイエロー……

見た瞬間、爽やかサラリーマンだと思った。

でも、今の私に、その爽やかサラリーマンと和やかに話す余裕は全くなかった。

込み上げてきたものが、今にも口から出てしまいそうなのこの状況では、申し訳ないが
 男性をスルーすることしかできなかった。

「……っ、ご、ごめんなさい……は、吐きそうで……」

言うだけ言って、男性を振り切ってトイレに向かおうとした。でも、なぜか男性が近づ
 ぐく配がする。

「これ使って」

にゅつと目の前に出されたのは、大判のハンカチ。咄嗟に手で要らないと断ったけれ
 ど、男性は退かなかった。

「あげるから。それと、よかったら腕に掴まって。ふらついているから危ない」

男性に言われるまで、自分が今どう歩いているかなんて気にしていなかった。

大丈夫です、と言いたかったが、今はそれすら口にする余裕がない。

もうなんでもいいやという心境で、目の前にあるハンカチを受け取り口に当てた。そ
 して反対の手で隣に立つ男性の腕に掴まる。

今とはにかく早くトイレに行きたい。そのことしか頭になかった。

「そこ段差ありますよ。気を付けて」

強い力で体を支えられながら、どうにか女子トイレに到達したのは覚えている。でも、
 そこから先の記憶は曖昧で、しばらくトイレでぐったりしていた。

どうにか貧血と吐き気が落ち着き、よろろと女子トイレを出る。多分二十分くらい
 はトイレに籠っていたと思う。

「大丈夫ですか」

トイレを出たところで声をかけられて、ハッとそちらを見る。すると、さつきハンカ
 チをくれてここまで連れてきてくれた男性がいた。

てつきりもういないと思っていたのに、待っていてくれたなんて。

「あ……!! 大丈夫です。あの……先ほどは、あ、ありがとうございました。助かりました……」

お礼を言えたことにホッとした。でもすぐに自分の醜態しゅうたいを思い出してしまい、恥ずかしくなった。

穴があつたら入りたいけど、改めてきちんとお礼を言わないといけない。勇気を出して顔を上げ、目の前にいる男性と視線を合わせた。……のだが、あまりにも綺麗な顔をしているのでびっくりを通り越して真顔になってしまふ。

——え、ちょ、何。この人、めちゃくちゃ顔が綺麗なんですけど……!

「あ、本当だ。さっきよりも顔色がちょっと良くなってますね。といつてもまだ青いというか白いけど」

そう言つて頬を緩ませた男性は、百六十七センチある私よりも目線が上だ。多分、百八十センチはあると思う。

目を引くのはその高身長ぶりだけではない。モデルのような小顔の中に、綺麗なアーモンドアイと整った鼻梁ひりょう。顔の大きさと全身のバランスも絶妙だ。手足も長い。

普段会社で接している男性とはまるで違う、ちよつと色気のあるイケメンだった。

——うわ、こんな人が私を気にかけてくれたなんて……そんな奇跡きせきみたいなのが人生で起こるとは……

生きてるとたまにはいいことがあるなあ、と感動するが、今はそれどころじゃない。

未だ目の前にいる男性に、立ち去る気配がないからだ。

男性は顎あごに手を当て、神妙な顔で私を覗き込んでくる。

「んー……でも、まだやつぱり顔色がいいとは言えないですよ。念のため、受診してはいかがです?」

受診と言われて内心焦る。今から受診となると、ここから少し離れた場所にあるかかりつけ医に行かねばならない。

会社に向かうことしか考えていなかった私にとつて、完全に想定外だ。

「えっ……でも、仕事に行かないといけないですし……」

咄嗟とつさにそう口にしたら、男性の表情が曇った。

「そんな顔色で電車に乗つてまた具合が悪くなつたらどうするんです? 体調が思わしくないなら、無理をするべきではないですよ」

「……うつ……」

思いっきり正論を告げられ、何も言い返せなかった。

黙り込んだ私を見て、男性がふつ、と微笑む。

「仕事熱心なのはいいことですけどね。でも、今日は休んでおきましょう。ね?」

「はい……わかりました……」

優しい笑顔なのに、なぜか圧を感じる。ここは大人しく従った方がよさそうだ。

「いろいろありがとうございます。では……」

お世話になったことに感謝しつつ、男性にお礼を言って歩き出そうとする。しかし、なぜか男性と一緒に歩き出したので、頭の中にクエスチョンマークが浮かんだ。

——なんで、こっち？ さっき駅のホームにいたよね、この人……

電車に乗る予定じゃなかったの?? という気持ちで男性を見上げる。その視線に気が付いたのか、男性が私を見た。

「心配なのでクリニックまで付き添いますよ。タクシーで行きましょう」

再度予想外の申し出に、思わず叫んだ。

「ええっ!? いいですよ、一人で行けますから!」

「そう言われても、私も見届けないと気になるので」

「でも、あの……通勤の途中ですよ? 早く行かないと仕事に間に合わなくなるのでは?」

もしや仕事のことを忘れているのではあるまいか。しかし男性は、なぜか「ああ」と微笑んだ。

「たまたまですが、今日の午前中は時間に融通が利くので大丈夫です。ご自分が大変な時に私の心配までしてくれてありがとうございます」

「え、いや、そういうわけじゃ……」

「で、どちらの病院に行きますか? かかりつけ医院はありますか?」

——この人、はつきり言わないと通じないのかも。

「……あの、助けていただいてこんなことを言うのは心苦しいのですが、初対面の方にそこまでしていただく理由がないというか……」

恐る恐る男性を窺うと、なぜか胸ポケットに手をつ込んで何かを取り出そうとしていた。

「あ………そうでした。自己紹介がまだでしたね。確かに、正体不明の男についてられるとか、怖いですよ。大変失礼いたしました」

いや、そうじゃない。どっちかっていうと一人になりたいんだけど。

喉まで出かかったけど、男性が名刺を渡してきたので意識がそっちに向いた。

「申し遅れました。私、宇津野といいます」

丁寧に両手で差し出された名刺を両手で受け取り、その紙面に視線を落とす。

宇津野基紀。彼の名前を確認した私の目が、その肩書に釘付けになった。

【赤塚・飯田弁護士事務所 弁護士 宇津野基紀】

——……え? 弁護士……?

驚きすぎてしばらく名刺から目が離せなかった。

しかし、ほんのり続いている頭痛に顔を歪める。吐き気はだいぶ治まったけど、まだ体調がよくなったわけではない。

そんな私に気が付いたのか、宇津野さんが「大丈夫ですか」と訊ねてくる。「やっぱりまだ具合が悪いのでは？」近くに紹介できる女性専用クリニックがあるので、そこに行きませんか。徒歩で行ける距離ですし」

「え。女性専用クリニックを紹介できるって、どういう……？」

私が興味を示すと、宇津野さんがにつこりする。

「姉が院長をやってるんです。開業したばかりのクリニックなんですけど」

開業したばかりの女性専用クリニック。姉が院長ということは女医さん。

この二つのワードで思い出した。

——そうだ。この前近所にいいクリニックがないか探してる時、駅の側に開業予定の女性専用クリニックがあったっけ。あれか!!

実は、ずっと近所で女医さんがやっているクリニックを探していたのだ。もちろんかかりつけのお医者さんとも相性はいいので、風邪などの不調ならそちらで問題ない。しかし、月のものに関することや女性特有の疾患に関しては、やっぱり女医さんの方が話しやすい。しかもクリニック自体が女性専用なら言うことなしだ。

これは渡りに船。是非是非、紹介していただきたい。

「あ、でも、かかりつけ医の方がいいならもちろんそっちに……」

「いえ!! 是非そちらのクリニックを紹介していただきたいです! お姉様が院長ということは、女医さんってことですよね?」

「もちろん。じゃあ……すぐそこなんです、行きましょうか」

「よ、よろしくお願いします……!」

会ったばかりの人の厚意に甘えるなんて、普段なら絶対にしない。でも、今は体調不良もあり、そんなことは言ってられなかった。背に腹は代えられないのだ。

私は歩きながら会社で電話し、体調が悪いので休むという連絡を手短に済ませた。

「はい、はい。では、よろしく願います。失礼いたします……」

会社への連絡を終え、一息つく。

「たかばさん、っていうんですね?」

私を見て宇津野さんが微笑んだ。名前は、今の電話の会話を聞いていたのだろう。

「すみません、名乗るのが遅くなりました。鷹羽朋英といいます。このたびは親切にしてくださいありがとうございます。……私も名刺を……」

さっき名刺をいただいた時に渡せばよかったと、慌ててバッグの中にあったカードケースから名刺を取り出し、宇津野さんに渡した。

彼は長い指で持った名刺を、まじまじと見つめている。

「鷹羽朋英さんか。自動車関係にお勤めなんですね。このメーカーの車、私、好きですよ」「ありがとうございます……私は経理事務をしているんです。……あの、もしお車の購入をご希望される時は、支店を指定していただければそちらの営業担当者を紹介することが出来ますので、お車に関するご相談や、新車をご希望の際は是非……」

「ありがとうございます。その時はお声がけますね」
こんな状況なのについて営業活動をしてしまった。

——長年今の仕事をしているとい……もう体に染みついちゃってるのよね……

車を購入する人が減っている昨今、うちのメーカーの車が好きだなんて言われたら、この縁を逃してはいけないような気がしてしまうのだ。

でも、私の急な営業活動にも宇津野さんは怯まなかった。嫌な顔もしないで話を聞いてくれた。

それだけでこの人に対する好感度がぐんとアップしてしまう。いや、もちろん車で声をかけてくれた時点でもかなり好感度は高いのだけれど。

「あ、ここです、姉のクリニック」

宇津野さんが立ち止まり、建物に向かって指を差す。その方向に顔を向けると、真新しい淡いピンク色のクリニックの看板があった。

駅から徒歩五分もかからない場所にあるテナントビルの二階だ。

女性が好きそうな柔らかいイメージのロゴデザインは、入る前から安心感を与えてくれる。そんなことを思いつつ、宇津野さんのあとに続いた。

クリニックに入り、専用のスリッパに履き替える。開業したばかりなこともあり、待合室の患者さんは二、三人いる程度。女性専用のクリニックだけど付き添いはOKということで、年配の女性に付き添っている男性もいた。

宇津野さんが受付の女性スタッフに声をかけると、女性が「おはようございます!」と笑顔で対応してくれた。反応からして、スタッフとは顔見知りのようだ。

宇津野さんが初診の患者さんをお連れしました、と説明したら、すぐに問診票を持ったスタッフが私のところに来てくれた。検温し血圧を測ったあと問診票に今の状態を細かく記入して提出する。それから十分ほど待合室で待機していると、最初に渡された番号札の番号を呼ばれて診察となった。

ありがたいことに運良く、初診の手続きをしてすぐに診察してもらうことができた。結果はというと、大満足だった。

宇津野さんのお姉さんである院長先生は、ものすごい美人だった。それにまず度肝を抜かれたのだが、肝心の診察もとても感じのいいものだった。

生理痛が酷いという相談に対し、いくつかの治療法をわかりやすく提示してくれた。話し方も穏やかで、ちゃんと私の目を見て話してくれる。一方的に先生の話を聞くので

はなく、私の話もちゃんと聞いてくれて、こんなに緊張しないですみ診察は初めてだった。
「では、体調がよくなるように、これから一緒に頑張りましょうね」

「はい、よろしく願います……！」

——なんか……話を聞いてもらえただけですごく気持ちが楽になった……

私が待合室に戻ると、ソファァーに座っていた宇津野さんが顔を上げた。

「お疲れ様。どうでした？」

「とりあえず血液検査をして、その結果を見て治療方針を決めましょうということになりました。あの……すごくよかったです。先生、とても話しやすかったですし……話を聞いてもらっただけで、少し体調がよくなった気がします」

「あ、ほんと？ よかった。そう言ってもらえると身内としても嬉しいです」

会計を済ませ、近くの薬局で吐き気を抑える薬と漢方薬をもらった。

「本当に大丈夫？ なんなら自宅までタクシーで送るけど」

「いえいえいえ!! そんな、とんでもないです!! もう一人でも大丈夫ですの……」

ここまででいいと言ったにもかかわらず、宇津野さんは薬局にも付き添ってくれた。

申し訳ないと思いつつも、なんとなく隣に人がいてくれるのがありがたくて、結局、彼の厚意に甘えまくってしまった。

それにしてもまだ午前十時前だというのに、今日はもうやりきった感でいっぱいい

ある。

——濃い……一時間が濃すぎた……早く横になりたい……

内心ぐったりしながら、ずっと付き添ってくれていた宇津野さんと向き合う。

「本当に、今日は何から何までお世話になりましたっばなしで……なんとお礼を言ったらいいか……ありがとうございました、助かりました」

何度も何度も頭を下げながらお礼を言う私に、宇津野さんは恐縮するように手でそれを制した。

「そんなに気にしないでください。私としては、しつこかったかなーってちょっと反省してたんです」

「え! そんなこと思いませんよ! 本当にありがたく思ってます」

真顔で伝えたら、宇津野さんがホッと頬を緩ませ、微笑む。

「よかった! 安心しました。家庭環境のせいとか、昔から具合が悪そうな人を放っておけなくて。だからつい、お節介だと思いつつ声をかけたんです。驚かせてしまってますみませんでした」

「え、家庭環境って……お姉さんがお医者さんだから、ですか?」

何気なく聞き返したら、宇津野さんがにっこりする。

「うち、両親も医者なんですよ」

——なんと。

「ご家族にお医者さんが三人もいるって、普通にすごくない？ でも、なるほど。親切にしてくれたのにはそういう理由があったのね。

なんていい人なんだ……と本気で感動した。

「じゃあ……私はこれで。本当にありがとうございました」

体を進行方向に向けつつ、会釈して帰ろうとした。しかし、なぜか宇津野さんに

「ちよつと待って」と引き留められた。

まだ何かあるのかな？ と足を止める。

「鷹羽さんの個人的な連絡先を教えてくださいませんか？」

「個人的な連絡先……ですか？」

私が戸惑ったのを察知してか、宇津野さんが慌てて小さく手を左右に振った。

「いや、変な意味じゃないんですけど……ほら、さっき新車買うなら営業担当を紹介してくれるって仰ったじゃないですか。いざその気になった時、店に電話するよりもまず鷹羽さんに連絡する方が気分的には楽かなって。この名刺にある電話番号って、本社の代表番号ですよね？」

「あ……」

自分で言っただけに、すっかり忘れていて、ハッとする。

——私ったら……勘違いをしてしまった……恥ずかしい……

「す、すみません。あ、じゃあ、さっきの名刺に書き足しておきますね」

「こちらこそ、なんだか申し訳ない」

——まあ、相手は弁護士さんだし。悪用なんかしないだろう。

さっき渡した名刺を一度返してもらい、そこに手書きで携帯電話の番号を書き足した。それを渡すと、宇津野さんが番号を見てにこりとする。

「ありがとうございます。その後の体調が気になるので、後日連絡させていただきます」

「あ、はい……なんだか、いろいろとお気遣いいただいてありがとうございます」

「いえ、では、私はこれで。どうぞお大事になさってくださいね」

去っていく背中に頭を下げつつ、私は自宅アパートへの道を歩き出した。

——……いい人、だったな……

お堅いイメージのある弁護士さんなのに、なんだか偉ぶったところがないし、笑顔が多くて爽やかだった。

いつもは体調が悪くなったあととは必ずと言っていいほどメンタルも落ちる。でも、今日は宇津野さんのおかげで、メンタルはさほど落ちていない。それどころか、いいクリニクを教えてもらって、いつもより気分がいくらいだ。

——もし今後、本当に宇津野さんが車を買って連絡してきたら、評判のいい営業さ

んを紹介してあげよう。
そんなことを考えながら、朝よりは多少軽くなった足取りでアパートに帰宅したのだった。

私の勤務先は、某国産自動車メーカーの小売店の本社だ。大学卒業と同時に新卒で採用されて以来、ずっとこの本社ビルが私の職場である。

ビルの一階は支店の一部として、最新モデルの自動車数が数台並ぶショールームと、車の修理や点検、車検をするサービス工場が併設されている。同じ敷地内には系列会社の中古車販売店も並んでいて、車に関する用事は全てここで完結すると言っているほど充実している。

とはいえ、私の所属する経理課は基本デスクワーク。一日中モニターと睨めっこしているか、電話対応をしているかだ。そしてこのフロアのメンツは、ここ数年変わっていない。

それが、ある意味私の悩みの種だったりする。

——気の重いことは先に済ませとことと……

有給休暇を取得した翌日。出社した私は、まず直属の上司に挨拶をしたあと、もう一人の人物のもとへ急いだ。

「酒井さん、おはようございます」

デスクにいたその女性は、私の声に反応しこちらを見上げた。

「あら。今日はお休みしなくて大丈夫なの？」

酒井洋子さん、三十八歳。私よりも十歳年上のベテラン社員だ。そして彼女は、ある意味このフロアの裏ボスのような存在なのである。

彼女は口元に笑みを浮かべながら、目は笑っていない。酒井さんに体調のことで嫌味を言われるのは、この会社に入ってからもう何度目になるだろう。

「はい。昨日は急なお休みをいただきご迷惑をおかけしました」

「相変わらずの体調不良？ 休むならもっと早く言ってもらいたかったわ。何年経っても体調管理ができないなんて、ちよつとどうかしてんじゃないの」

「すみません……出勤途中に、貧血になってしまつて……」

周りが息を潜めて私達の会話に耳を傾けているのが伝わってくる。

でも、酒井さんはそれには気付かずはつきりと不快感を露わにした。

「……ふん。まあ、電車の中で倒れて人に迷惑をかけるのも困りものだしね。それに、無理して出勤して具合悪くなられても困るし、いいんじゃないの。……あなた宛ての急ぎの仕事は全部そのままだから。さつさとやつて」

じろりと私を一睨みすると、酒井さんは正面に体を戻してしまった。

「……はい。わかりました……」

言われたことがほぼほぼ想定範囲内だったので、内心ホツとする。

——これだけで済んで、よかった……もつとネチネチ言われたらどうしようかと思っ
たわ……

自分の席に戻り、モニターにベタベタ貼られた付箋ふせんをチェックしていく。

【○○支店の佐藤さとうさんに電話】

明らかに酒井さんの筆跡だとわかる付箋を見ると、いつも胃が痛くなる。彼女はいつもこうだ。なんの件で電話がありました、とは書かない。ただ、電話があったことだけを付箋に記す。これは酒井さんの私に対する嫌がらせの一つなのだ。

こういうことばかりされていると、うちの会社ってコンプラどうなってるの？ って、いつも思う。それとなく上司に相談したけど、話は聞いてくれても、結局何かあればまた相談に乗るからと言われるだけで、一向に状況は改善されないままだ。

——まあね。いつもこんな感じだから慣れたけど……でも、毎回思うけど電話する相手に申し訳ないのよね……

ため息をつきながら件の佐藤くたんさんに電話をするため、受話器を持ち上げた。

私と酒井さんの関係がこじれてしまったのは、ある出来事が原因だった。

新入社員として本社経理課に配属になって間もない頃、私は酒井さんから、彼女が中

心となっている女性グループの飲み会に誘われた。

『女性社員同士の親睦を深めるため、定期的に行ってる飲み会なの。是非参加してくれない？』

先輩社員からそう言われて、新入社員の私は二つ返事で、参加をOKした。しかし、たまたま飲み会の前日辺りから体調を崩してしまった私は、結局その集まりに参加することができなかった。

一度くらいなら、酒井さんもこれほど機嫌を損ねることはなかっただろう。けれど、その次の集まりも、私は体調不良で参加することができなかった。

それが、酒井さんの機嫌を思い切り損ねてしまったのだ。

彼女の言い分はこうだ。

『……部長主催の飲み会には参加したのに、私が主催する飲み会には参加できないって
いうのね？ しかも毎回ドタキャンってどういうこと？ バカにしてんの？』

そんなことは決してなく、本当にたまたま生理の時期と飲み会が重なってしまっただけなのだ。だけど、そんな弁明をさせてもらえない機会は今全く与えられないまま今に至る。

その時から、酒井さんは私に対して辛辣しんせきな態度で接してくるようになった。本気で酒井さんと仲よくしたければ、強引に説明することで誤解は解けたかもしれない。でも、彼女の主催する飲み会に参加するのは、彼女と年の近い女性がほとんど。いつも昼休み

に集まって大きな声でランチ会をしている彼女達は、他の人を寄せつけない独特のオーラを放っており、当時新入社員だった私がその輪の中に入っているはずもない。というより、結束が固そうな彼女達の中に好んで入りたいとは思えなかった。

結局私は、酒井さんの主催する飲み会に参加しないまま今日まで生きてしまったのだ。

——酒井さんがいない時は平和だったな！

彼女は途中、産休育休を取っていて、今年の春に復帰して現在は時短勤務だ。

酒井さんのグループの女性達は単独だとそれほど嫌な人はいない。話しかければ普通に返してくれる。だけど、集まると、途端に近寄りがたい人種にカテゴライズされてしまうのだ。

とはいえ、もう六年もこの状態でいると、酒井さんのことを除けば他に不満もないため、なかなか転職には踏み切れないのである。

——自分に与えられた仕事をきっちりやれば、毎月ちゃんとお給料がもらえるんだもの。簡単には辞められないよ。

仕事にも慣れたし、酒井さん以外の社員との関係はまずまず良好。六年かけて培った今の関係を、彼女のせいで手放すのはやっぱり惜しいと思ってしまう。

少々居心地の悪さを感じながらも、私はこの会社で働く日々を送っているのだった。

残業なんかしたら絶対に酒井さんに文句を言われそうだったので、死に物狂いで溜まっていた仕事を時間内に片付けた。

——酒井さんは四時で上がるけど、お仲間が見てると思うと気が抜けないわ……

きっちり五時で仕事を終え、会社をあとにする。一階の支店でサービスフロントをしている女性と出くわしたので、最寄り駅まで話しながら一緒に帰った。

——各支店のサービスフロントさんとは仲がいいんだよね……いっそ、どこかの支店に異動願いでも出そうかなあ……

酒井さんとのストレスフルな生活がなくなったら、毎月の体調不良も改善しそうだ……と考えていたら、バッグの中でスマホが震えた。

「ん？　なんだろう」

画面には、見たことのない番号が表示されている。

——この番号は……なんだっけ？　どこかの業者さん？　でも、直接連絡がくるような案件は何もないはずだけど……

でも、万が一という可能性もある。私は応答をタップしてスマホを耳に当てた。「も、もしもし……」

『宇津野です。鷹羽さんですか？』

スマホから聞こえてきた明るい男性の声に、真つ正面を見たまま歩みを止めた。

——う……宇津野さん!? 昨日の今日で、どうして電話がかかってくるの?

「は、はい。鷹羽ですが……あの、昨日はありがとうございました」

「いえ、たいしたことはしてませんから。それより体調はどうですか?」

「おかげ様で、今日は出勤して、今、定時で仕事を終えたところです」

状況を説明したら、スマホから聞こえる声のトーンが少し上がった。

「よかった……いや、ご迷惑かもしれないとは思ったのですが、あんな場面に遭遇したこともあって心配になってしまいました。でも、一日仕事ができるまで回復しているのなら安心ですね」

「わざわざすみません。もう大丈夫です」

そこまで話して、ふと彼に借りたハンカチのことを思い出した。

——ハンカチは洗ってアイロンをかけてある。くれるって言われたけど、やっぱり返した方がいいんじゃないのかな……?

「あ、あの!」

「はい、なんででしょう」

「お借りしたハンカチなんですけど! やっぱりお返しします。助けていただいた上にハンカチまでいただくのは申し訳ないので……」

すると、スマホの向こうで、フッと宇津野さんが笑った気配がした。

『鷹羽さんは、真面目な方なんですネ』

「え?」

『緊急事態だったし、気にすることなんてないのに。私が手渡した瞬間、あのハンカチはあなたのものになったんですよ』

笑いまじりの宇津野さんに、どう返すか悩んだ。

「や、で、でも……なんだか高そうなハンカチだったので……」

『そんなことはないですよ。でも、鷹羽さんが気にされるようなら、ハンカチは引き取りましょうか』

相変わらずクスクス笑っている宇津野さんからは、気分を害している感じは一切ない。むしろ、楽しんでいっているような気がする。

「どのようにしてお返しすればいいですか? あ、名刺にある事務所に送ればいいですか」

これなら相手を煩^{わづら}わせることもないし、最良の方法だと思った。しかし。

『いえ、鷹羽さんがまだ持っていてください。できれば直接お目にかかりたいので』

「え? それはどういう……」

『日程を調整して、またご連絡します』

「え、あの……ちょっと」

『今、帰宅途中なんですよね？ お電話して足を止めさせてしまい、申し訳ありませんでした。気を付けてお帰りくださいね』

「ありがとうございます……」

『では』

静かなトーンで締めくくって、宇津野さんが電話を切った。

スマホをバッグの中にしまいながら、軽く首を傾げる。

——できれば直接お目にかかりたいので——って、なんで……？

言い方は柔らかかったけど、押し切られてしまった。

疑問に思っているうちに、宇津野さんが医者一家の出身だということを思い出す。

——もしかして、めちゃくちゃ心配されてるのかな……

だとしたら本気で申し訳ない。ハンカチを返すだけでなく、菓子折の一つでも用意した方がいいのだろうか。

世の中には、本当に親切な人がいるんだなあ。彼みたいな弁護士さんなら、安心して仕事を任せられるに違いない……と、しみじみ思いながら帰路について。

真っ直ぐ帰宅した私は着替えて、財布やスマホなどの必需品を仕事とは別のバッグに

入れ替え、再び外に出た。向かったのは、マイカーを停めている近所の駐車場だ。

そもそも車の会社に就職したのも車が好きだからだった。そんな私のマイカーは排気量二リッターのSUVである。

今住んでいるアパートはかなり古く、築年数が三十年は経過している。でも、大家さん所有の駐車場があるという条件に惹かれ、ここを選んだ。

正直に言うと、今の給料で車の維持費を捻出するのはなかなかキツイ。日々の節約はもちろんだが、会社の社員特権を最大級に活かし車を購入したり、車検を受けたり、タイヤを買ったりして、どうにか維持しているのである。

——ぶっちゃけこのために、酒井さんが嫌でも今の仕事を辞めたくないという……
地方にある実家にも電車ではなくマイカーで帰省する。そのたびに両親から、「車に乗りたくないならこちに帰ってくればいいのに」と言われ、毎度お決まりのように「そのうち帰るから今は自由にさせて」と誤魔化している。

実家がある地方は田舎で、生活に車は必需品だ。そんな環境で育ち、車好きの父の影響を受けた私は、車のない生活など考えられないのである。

——それにドライブは気分転換にもなるからね。

好きなアーティストの曲を聴きながら車道を走っているだけで、気が付けば気分が上がっている。それに車の中なら歌だって歌い放題だ。カラオケに行くより手軽で、手っ

取り早い。

今日も、駐車場のある大型スーパーに食料品を買いに行く途中、ずっと歌を口ずさんでいた。

でもなぜか、今日に限って頭の片隅にあるのは、アーティストではない別の人だった。

——宇津野さんって……どういう人なんだろう？　なんか気になる。

弁護士というお堅い仕事をしている人なのに、常に笑顔で話しやすい。出会ったばかりだということを忘れて、気軽に話し続けてしまいそうになる。

それにしても、駅でたまたま具合が悪いところに遭遇しただけの私を、いつまでも気にかけてくれるなんて、どんだけいい人なんだ。

もしかしたら、普段酒井さんに冷遇されている私を不憫に思って、神様が特別に出会わせてくれた人かもしれない。

——……だったらいいな。

そんなことを考えていたら、いつもよりもスーパーまでの道のりを短く感じた。

それから三日後。

仕事を終えて宇津野さんのお姉さんが院長を務めるクリニックを受診し、最寄り駅の薬局で薬をもらって帰路についていた時のこと。

何気なくスマホを開くと、画面に不着信の通知が残っていた。

——宇津野さんだ。

番号をタップすると、何度かコール音が聞こえたあと、耳馴染みのいい低音が聞こえてきた。

『はい。鷹羽さん、お電話いただいてすみません。かけ直しますよ』

「えっ！　いえ、そんな、いいですよ！」

『かけ直します。ちょっとお待ちください』

そう言くと、宇津野さんは本当に電話を切った。

——ほ、本当にいいのに……！　律儀な人だな。

彼の気遣いに驚いていると、すぐにスマホが震えた。

『はい』

『三日ぶりですね。体調にお変わりはないですか？』

なんだか体調を心配されるのが挨拶のようになっていて、自然と顔が笑ってしまう。

「おかげ様で元気です。さっき、お姉様のクリニックに行ってきたんですが、前回の検査結果を踏まえて、これまでの漢方薬の処方を変えることになったんです。しばらくはそれで様子を見ることになりました」

『そうですか。治療方針が決まってよかったです。姉の診察はどうでしたか？　納得の

いくものでしたか』

「なんだか宇津野さんの声がいつも以上に明るい。本気で喜んでくれてるっぽい。とっても。先生の喋り方はすごく優しいし、質問にもちゃんと答えてくれるので、ありがたかったです。これからも通おうと思ってます」

私にしては若干鼻息荒めに宣言する。

この件に関しては、本気で宇津野さんに感謝していた。あの場で彼がああクリニツクの名前を出してくれなかったら、きっと受診しないままだったと思う。

『そうですか！ いやあ、ありがとうございます。姉も患者さんにそんな風に言ってもええたら喜ぶと思います』

——さて、そろそろ本題に入ろうかな。

『そういうえば、ハンカチの件、調整できましたか？』

そもそも宇津野さんが電話をかけてきた理由はこれだろうと、当たりをつける。

『ええ、それでなんですが……』

『はい、いつにしますか？』

『もしよければ、食事を一緒にどうかと思ひまして』

『え。食事ですか？』

『ええ。知り合いがビストロを営んでいるので、よかつたらそこで。まだ開店して半年

ほどの店ですが、有名店で修業したシェフなので味は保証します。どの料理も美味いですよ。私のお勧めは特製のオリジナルデグラスソースがかかったふわふわ卵のオムライスです』

言われた途端、頭の中に茶色いデミグラスソースがかかった真っ黄色のオムライスという、劇的に食欲をそそるビジュアルが浮かんだ。

——やばっ。想像しただけでも唾液が……

『お……美味しそうですね』

『はい。美味しいです。ご馳走しますので、どうですか？』

ご馳走するとダメ押しされて、私の心は大いに揺らいだ。神様云々は冗談のつもりだったのに、まさかここまでいい人が現れるなんて。

——ほ……本当にこんなことであるの？

弁護士でイケメンの宇津野さんからの食事の誘いに、私の胸がドキドキと早鐘を打ち始める。

でも、一度しか会ったことのない男性と、二人きりで食事なんてしてもいいのだろうか。子どもの頃から体が弱くて学校を休みがちだったせいなのか、それとも元々の性格なのか、どちらかというと私は積極的に人と関わるのが苦手である。

酒井さん達に言われ放題なのは、毅然きぜんと言い返せない自分自身にも問題があると思っ

ていた。

だけど、宇津野さんは私を助けてくれた人だ。それにハンカチも返さなくてはいけない。本来なら会ったばかりの人、それも異性と二人の食事は丁重にお断りするところだけど、今回は特例だと自分に言い聞かせた。

「わ、わかりました。では、ご一緒させてください」

堅苦しい返事になってしまったが、スマホからは穏やかな声が聞こえてくる。

『よかった。では、日時と場所なのですが』

宇津野さんの説明を聞き逃さないよう、しっかりと確認していたら、心配だからと電話のあとに場所をメッセージで送ると言われて恐縮する。

「何から何まですみません……でも大丈夫です。お店の名前と住所も伺いましたし。もしわからなかったらお電話しますね」

宇津野さんには謝ってばかりだ。

『かしこまりました。なんというか、念には念を入れておかないと、私が不安なんですよ。仕事柄、一方的に話す癖があるので、鷹羽さんがわかっていないのに私だけが突っ走っていたら言ってください』

「そんなことはないですよ。宇津野さんの声って聞き取りやすいし、話し方もわかりやすいと思います」

言われると、確かに彼は早口かもしれない。

でも、低すぎず高すぎない声の大きさがちょうどよく、滑舌がよく通る声なので電話でも聞き取りやすかった。

簡単に言えば、イケボなのでいくらでも聞いていられる。そんな声だ。

『そう言ってもらえると嬉しいですね。親に感謝しないと』

クスクス笑っている宇津野さんに、こっちの気持ちも和む。

知り合って間もない人なのに不思議。なんだか前から知ってる人みたい。

「そうだ。あの、よければ食事は、是非私にご馳走させてください」

お礼をするいいタイミングだと思い、こう申し出た。

『いえ、いいですよ。誘ったのはこっちですし』

「いいえ、先日助けてもらったお礼をさせてほしいんです。これくらいしか思いつかなくて」

『気を遣わせてしまい申し訳ない。でも、電話したのも食事に誘ったのも、私が好きでやっていることなので気にしなくていいですよ』

「……え？ それは……」

『言葉通りの意味です。あなたと話がしたいから電話をかけているんです。男が、何も用事がないのに女性に電話をかけるって、理由は一つしかありませんよ』

ど直球な宇津野さんの言葉に面食らってしまう。

「え……？」

『私は、あなたを口説きたくて電話したんです、鷹羽さん』

続けて剛速球がやってきて、言葉が出ない。

しばらく無言でしたら、スマホの向こうで吐息が漏れた気配がした。

『驚かせてしまつてすみません。私は性格的に隠し事ができないので、さっさと気持ち
を伝えた方がいいかなと。その方が鷹羽さんにとつてもいいでしょう？ きつと、なん

でこいつ何度も電話してくるんだらうって疑問に思っていたでしょうし』

「い、いえいえ！ そんなことは思つてません！ どちらかという……一度しか会つたことのない私を氣にかけてくれるなんて、とてもいい人だなんて……」

——び……びつくりした。

神様が特別に会わせてくれた人かも、なんて考えたりもしたけれど、それはあくまで希望であつて本氣じゃなかった。

だからか、言われたことが未だに信じられない。心臓の音がドツ、ドツ、とあり得な
いくらい大きく脈打つていて、自分の体ながら不安になる。

『いい人ですか……よかったです。次回、会つてゆっくりお話ししましょう』

「わかりました……」

わかつたと口では言っているけれど、半分くらいはなんでこうなったのかよくわかつていない。

なんだか夢の中にいるみたいだ。

『では、お目にかかるのを楽しみにしています』

「はい……」

通話を終え、ゆつくりとスマホをバッグに入れた。

彼の電話に出るまでは、いいクリニックを紹介してもらえて気持ちホクホクしていた。それが今は、クリニックのことなどすっかりどこかに消え失せ、頭の中は宇津野さん一色になっている。

最後に恋をしたのは学生時代。

友人の紹介でなんとなく付き合い始めたけれど、好きになり切れずにお別れした。恋とも言えないような経験しかない。

これは……私にもやつと春が来たということなのだろうか。

——待て、私……。落ち着いて考えてみよう。

相手は弁護士だ。しかも、あんなにイケメンで、見ず知らずの私を助けてくれるような優しい人。そんな人が、果たして本当にフリーなのか？ きつと周りには彼に想いを寄せる女性がいくらでもいるだろうに、なんで私？

そう思ったら、一氣に頭が冷えてきた。

——だ、だよね……あんなイケメン、黙ってたって女が寄ってくるよ……もしかして私、チョロそうだって思われて、声をかけられたのかも……

世の中には、本命がいても軽い気持ちで他の女に手を出す男が本当にいるのだ。

『彼ったら、私という女がいながら、会社の後輩にも手を出してたのよ!? クソ野郎でしょ!』

これはつい数年前、学生時代からの友人が言っていたことだ。

友人の彼氏は、高校時代のクラスメイト。当時からずっと交際し晴れて婚約したのだが、なんと彼が友人に内緒で会社の後輩に手を出しているのが発覚し、大変な修羅場になった。

私はその話を聞いて、絶対に浮気をする男性とは結婚したくないと強く思ったのを覚えてる。

結局友人は、文字通り相手に泣きつかれて、婚約解消はせずに結婚した。

けれど、両親の仲がいい私にとっては思った以上に衝撃を受けたのか、それ以後、男女交際に慎重になりすぎてしまい、全くご縁がないのである。

——だって、世の中にはごまんと男性がいるのに、わざわざ浮気するような男性を選ぶ必要なんか、絶対ない。

そう、私はどんなに相手がイケメンでも、立派な職業に就いていても、遊びの相手は絶対に無理なのだ。

果たして彼はどうだろう？

期待する心と相反するように、私は傷つかないよう心に予防線を張るのだった。

二

宇津野さんと食事の約束をした日。

私の体調を気遣ってくれたのか、土曜日の昼に予定を組んでくれた。それは、正直とでもありがたかった。

——なんかほんと、できる男って感じなんだよなあ、宇津野さんって……

普段よりだいぶ遅い時間に起きた私は、ベッドの端っこに腰を下ろして宇津野さんと電話のやりとりを思い出した。

『鷹羽さんのお住まいの近くまで車で迎えに行きますよ。どの辺りですか?』

彼はアパートの近くまで迎えに来てくれると言った。

その提案は普通にありがたいことなのだが、相手が宇津野さんなので悩んでしまう。

そもそも異性と二人きりの食事っていうのがもう久しぶりすぎて緊張するし、口説きたいとはっきり言われたのも初めてだし。

目的地までは最低でも車で三十分はかかる。その間、ずっと狭い車内で彼と二人きりっていうのは、恋愛初心者の私には荷が重い。

『ドライブがてら自分で運転していきますので、大丈夫です。お気持ちだけいただきます……』

調べたら店の近くにコインパーキングがあったので、自分で運転していくことにした。『あ、車の運転お好きなんですか？ それもそうか、自動車の会社にお勤めですもんね。なんか……いいですね。運転している姿を見てみたいです』

せっかくの申し出を断ったら気を悪くするだろうかと心配したが、意図せず好印象を与えたようで調子が狂う。

困惑しながらも、ぼちぼち出かける準備を始めることにした。

首が丸出しのショートボブヘアの私は、基本髪を耳にかけるスタイル。普段仕事の時はシンプルなクリスタルの一粒ピアスだけど、休日は耳朶みみかさから垂れ下がるタイプのものをつけることが多い。今日も休日にしかつけない、細いゴールドのチェーンが顎の辺りまで垂れ下がるタイプのピアスを選んだ。

服は男子受けを全く考えないマキシ丈のロングスカート。メイクは普段極薄の超ナ

チュラルメイクだけど、今日はアイラインをくっきり入れて、お気に入りのリップを塗った、休日仕様のしっかりメイクだ。

—— なんていうか、デートっぽくない格好だな……

鏡に映る自分を見て、ちよつとがっかりした。

これから男性と食事に行くのに、本当にこの格好でいいのか悩む。でも、考えてみたら、まだ口説きたいと言われただけで、付き合っているわけじゃない。

相手の真意がわからないうちは、あまり意識しない方がいいか。

極力平静を心がけながら時計を見て、スマートキーを手に部屋を出た。

やや早い時間に家を出たこともあり、予定よりもだいたい前に目的地付近に到着した。事前に調べておいたコインパーキングに車を停めて、待ち合わせ場所のビストロが入ったビルに向かって歩く。

すると、目的のビルの前にすらりとした男性が立っているのが見えた。

頭が小さく遠目からでも長身とわかる。上半身は黒かネイビーのシャツを着ており、濃い色が全身を引き締めて見せ、男性のスタイルのよさを際立たせていた。

—— 五十メートルくらいは離れているというのに、この位置からでもイケメンだって

わかるって、どんだけなの……

そんな人と今から食事をする現実には、怯みそうになる。

でも、今日のために、洗ってアイロンをかけたハンカチを、わざわざそれを入れるために購入した紙袋に入れて持ってきたのだ。

怯みそうになる自分に気合を入れながら、宇津野さんに歩み寄る。

近づいてきたのが私だとわかると、それまでどこか余裕のあった宇津野さんの表情が、少しだけ強張った気がした。

——そんな、思ってたのと違うって、言いたげな……

「今日の鷹羽さん、すごく綺麗ですね!!」

距離が数メートルほどになったところで、宇津野さんが足早に歩み寄ってきて、興奮気味にそう捲し立てた。

——あれ？ 思ってた反応と違う……

想定外の反応をされたせいで、思わずばかんとしてしまった。

「もちろん先日の鷹羽さんもお綺麗でしたけど、今日は雰囲気ガラッと変わって、一緒にいるとちよつと緊張しちゃうレベルの美しさです」

「え、あ、そ……そうですか？ ありがとうございます……」

「あ、すみません。会って早々べらべらと……遠くから鷹羽さんが歩いてくるのが見えた瞬間から、なんだかドキドキしてしまって。柄にもなく緊張してしまいました」

「え。そ、そんなに……?」

未だかつて、こんなに外見を褒められたことなどない。しかも、宇津野さんの顔がほんのりと赤くなっているところから、これはお世辞じゃないとわかる。

そんな宇津野さんを前にして、恋愛経験の乏しい私が冷静でいられるわけがなかった。

——は……恥ずかしい……

まだ会ったばかりだけど、恥ずかしすぎていたたまれない。こういう時ってどういうリアクションをすればいいのか、本気で悩んでしまう。

「もう開店してるんで、行きましょうか」

「……はい」

にこにこしている宇津野さんに促されながら、改めて意識してしまう。

——口説きたいって、本気なのか……?

こっちまでドキドキしつつ、ビルに入った。

目的のビストロは、いくつもテナントが入る商業ビルの一階奥にあった。通路を真っ直ぐ進み、今日のランチ内容を記した立て看板が見えたのと、デミグラスソースの香りがふんわり漂ってきたのはほとんど同時だった。

——うわ、いい匂い……!

お店に入る前から、頭の中で何を食べようか、メニューがぐるぐるしてる。

「どうしよう……ここはやっぱりオムライスを食べた方がいいですか？」

半歩前に行く宇津野さんに訊ねたら、こつちを振り返ってくれた。

「そうですね、オムライスはまず間違いない美味いんです。でも、ハンバーグも肉汁がジューシーで美味しいですし、ビーフシチューもお肉がとろとろで美味いんですよ。つまり、どれを食べても美味しいです」

「えー!! そんなの聞いたら……余計悩んじゃいますよ! どうしようかな……」

本気で悩む私を横目に、クスツと笑った宇津野さんがビストロのドアに手をかけた。木製のドアを開けた瞬間、ベルの音がチリンと鳴って、店の中から「いらっしやいませ」と声がかかる。

「こんにちは」

宇津野さんが中を覗き込むと、奥から出てきた女性が「あら!」と目を輝かせた。

「宇津野さん! いらっしやいませ!! さあ、どうぞどうぞ」

「どうも。予約席ってどこですか?」

「こちらです」

スタッフの女性は、多分三十代から四十代くらい。髪を一つに纏め、赤いエプロンをしている。

女性に案内されつつ、宇津野さんのあとをついて店の中を進む。店内は全体的に木が

多く使用されたウッディな空間だった。テーブル数はパツと見た感じあまり多くないが、厨房を囲むようにカウンター席が設けられている。木製のテーブルには赤と白の可愛らしいチェックのテーブルクロスがかかっていて、店内を明るく彩っていた。

女性やファミリー層に人気がありそうだな、なんて思いながら、予約席の机が置かれた窓側の奥の席に通され、向かい合せて座った。

開店間もないせいなのか、私達の他に先客は二組。店内の席にはまだ余裕がある。

「お知り合いが営んでいると仰ってましたが、さっきの方がそうですか?」

バッグを隣の席に置いてすぐ目の前の宇津野さんに質問した。

「ええ。あの方もそうですが、厨房にいるシェフもです。ご夫婦で営まれているので」

——なるほど。

心の中で納得しながら、手渡されたメニューに視線を落とす。宇津野さんから事前に聞いていた通り、当店人気ナンバーワンのオムライス、男性人気ナンバーワンのハンバーグ、当店自慢のデミグラスソースを使ったビーフシチュー……と書いてある。

どれもこれも美味しそうで、私を大いに悩ませた。

——これじゃあどれにするか決めるだけで日が暮れそう……

「どれにします?」

「どれにします?」

「宇津野さんはもう決まっているんですか？」

「私ですか？ はい。家を出る時から何を食べるか決めてきました」
なんと。

「え……な、何にするんですか？」

「ハンバーグです。今朝は起きた時から肉を食べたい気分だったので」

「……そうですか……どうしようかな……」

ハンバーグと聞いて、ちよつと心が揺らぐ。目の前で美味しそうに食べられたら、私もハンバーグが食べたい……と思つてしまひそう。

「決まらないようであれば、シェアするという手もありますよ」

——シェア。……シェア!!

宇津野さんからの提案に、ハツとする。

「えっ。い、いいんですか？」

思わずその提案に食いついてしまふ。居酒屋とかイタリアンでシェアするのはよくあるが、洋食屋でシェアをするのはアリなのだろうか。

「はい。この店、ファミリ層にも人気があるので、みんなよくやってますよ」

「え……じゃあ、私はオムライスを頼むので、ハンバーグとシェアしていただいてもいいでしょうか？」

「もちろんです」

宇津野さんが笑顔で頷く。

「ありがとうございます！」

注文を済ませると、ランチについてくるソフトドリンクが先に運ばれてきた。私はお店のオリジナルレモンスカッシュ、彼はコーヒー。

グラスの下に沈殿しているレモンの果肉をよく混ぜてから吸うと、すっぱ甘いレモンと炭酸が喉にガツンとくる。これ、すごく美味しい。

ちびちびレモンスカッシュを飲みながら、優雅にコーヒーを飲む宇津野さんをチラ見する。外見はやつぱりイケメン。それに優しくて、さりげない気遣いもできる弁護士という、ものすごい高スペック。

そんな人が会ったばかりの私を口説きたいとか、本気で言っているのだろうか。

——今まで男の人から、いきなり好きなんて言われたことないし、そういう相手とどんな会話をすればいいんだろう……

とりあえず何か話さないと、と考えていたら、ハンカチのことを思い出した。

——つ、と。そうだ。先に渡しておかないや。

レモンスカッシュをテーブルに置き、バッグの中からハンカチの入った袋を取り出した。

「あの、遅くなりましたが、ハンカチをありがとうございました」
 テーブルの真ん中にハンカチの入った袋を置く。

「あの時は本当に、親切にしてくださいまして助かりました」
 姿勢を正し、深々と頭を下げる。

「やめてください。いいんですって。私としてはあの出来事があったからこうして鷹羽さんと知り合いになれたので。むしろこっちがお礼を言いたいくらいですよ」

静かな口調。だけど、どこか声が弾んでいるように聞こえる。

「宇津野さん……この前からそういったことをよく口にされますけど。どこまで本気なんですか」

「どこまでって、全部ですけど。こんなこと、冗談で言えませんが」

真顔で返されて、言葉に詰まる。

——冗談で言えない……？ ってことは、この人、本気で私を口説くつもりなの……？

「いやでも、だからってなんで私なんですか……？ あの朝、私、あなたに好かれるようなことは何もしていないのに、どこに好きになる要素があったんです？」

真っ青になって吐き気を我慢している女が好きと言われたら、それはそれで怖いけど……

宇津野さんの顔を警戒心いっぱいに見つめていたら、可笑し^{おか}そうにクツ、と肩を揺ら

される。

「鷹羽さんは気が付いてない？ 私と毎朝、あの駅で会っていたこと」

「……え？ 会って？」

「そう」

「本当ですか？ 私、全く覚えがないんですけど……」

こんなイケメン、一度見たら絶対忘れないはずなのに、私にはこの人を駅で見た記憶がない。

宇津野さんは口元に手を当て、私から目を逸らす。

「まあ、私が一方的に鷹羽さんを見ていただけなんですけどね。大体いつも同じ時間にホームでお見かけするので」

「え、あ……そうだったんですか？」

朝のホームではいつも、呪文のように「会社行きたくないな、酒井さんに会いたくないな」と心の中で唱えている。きつと周囲に目がいけないのはそのせいだと思う。

だってこんなにスタイルのいいイケメンが近くにいたら、絶対に気が付くはずだから「いつもね」

宇津野さんがコーヒークップをソーサーに戻しつつ、私にチラリと視線を送ってくる。

「鷹羽さん、ホームのどこか一点を見つめながら電車が来るのを待ってるんだ。最初、